高山正樹さんのお話し

（沖縄言葉で挨拶）…。
ぐすーよー、ちゅーうがなびら
ちゅーや わじゃわじゃめんそーちうたびみそーち いっぺー にふぇーでーびる
わんねー 高山正樹やいびーん みしっちょーてぃくぃみそーれ
ゆたさるぐとぅうにげーさびら

(手話通訳の方に)あ、訳さなくてもいいです。全然打合せのないことを言いました。要約筆記の方、手話の方、ごめんなさい、訳す必要はありません。どうせこの会場にいらっしゃる方、だれも分かっていないので大丈夫です。

幕開けでは「かぎやで風」という踊りを見て頂きました。「かぎやで風」と書いて、「かじゃでぃふう」と読みます。琉球王朝時代に作られた音楽です。ご存知のように100年ちょっと前まで沖縄は日本ではありませんでした。沖縄では、何か催しがあると、必ず一番最初に披露される曲です。元来、琉球王朝には踊り奉行という役職があって、三線を弾く人も踊りを踊る人もみんな男性でした。女性は一切踊ることはありませんでした。その琉球王朝が、いわゆる「琉球処分」で日本に併合されて、琉球王朝で踊りを踊っていた人たち、三線を弾いていた人たちは仕事が無くなりました。この人たちはどうしたかというと、遊郭で、遊女に三線を教えたり踊りを教えたりするようになります。芝居小屋を建て、お芝居をやり、その中で新しい踊りを創作しました。そうした事情があって、沖縄の人にとっては、琉球舞踊とか三線とかは、大変高貴な芸能であるとともに、卑しい遊びでもあるという両義的な意味を持っています。幕開けで踊った「かぎやで風」は古典で、琉球王朝時代の演目ですが、今からおおくりするのは、明治以降、下野した役人たちが創りはじめた新しい踊り「雑踊り（ぞうおどり）」です。「かぎやで風」は貴族にしか着ることが許されていなかった紅型の衣装でしたが、これから見て頂く「雑踊り」は、絣とか、民衆が着ていた衣装で踊ります。作者の分からない曲も沢山ありますが、今から踊る「太鼓囃子」は、20～30年前に、宇根伸三郎先生という「しばいしー（役者）」がお創りになった曲です。それをお弟子さんたちがしっかり受け継いできた踊りです。もともとふたりで踊る曲として創られましたが、こういう大きな舞台で踊るときは、何組かが一緒に、皆、受け継いできた同じ振りで踊るのですが、今日はちょっと挑戦をしてみようと思います。最初と最後、一組だけ違う振りで踊ってみようと思います。本当はそういうことが許されるのかどうか、どうなのでしょう、私はヤマトゥンチュー、沖縄の人ではないので、沖縄の伝統的な芸能をやらせていただく時に、その形を変えてしまうということは、もしかしたら大変失礼なことなのかもしれません。でも、沖縄の芸能というのは、元来新しいものをどんどん取り入れて発展してきたものです。古典も大和の影響をたくさん受けているのです。そういうチャンプルー、ごちゃまぜの芸能、どんどんと新しいことを取り入れ挑戦してきたという歴史がある芸能です。だからこそ、今も新し

い踊りが、毎年数百曲出来ていると聞いています。それが、古典でありながらも、今も少しずつ深化しながら、生き生きと踊られているのだと思うのです。

琉球王朝時代は、民衆はその王朝から搾取されていた。でも最近では、琉球王朝と民衆の関係はそう単純なものではなかったという分析をする研究も発表されているようです。確かに、ただ単に搾取されていただけなら、これほどまでに琉球王朝の踊りが沖縄の人々に受け入れられているはずはない。どうもそこに、未来に向けての一つのヒントがあるような気もするわけです。

先ほど牛島先生のお話しがありましたが、5 年ほど前、明治大学で牛島さんが講演された時にも、我々が踊りと三線で前座を務めさせていただきました。沖縄を本当に理解するためには、古い沖縄の芸能を知ることが絶対に必要だということで参加させていただいたのです。今回も同じ思いで、ぜひとも参加させろ！とお願い？しました。そして幕開けで古典を見ていただきました。

さて今からご覧いただく「太鼓囃子」は、我々の新しい挑戦です。どんなことになりますやら、どうぞゆっくりとご覧ください。